

藤原潤子著

『呪われたナターシャ

—現代ロシアにおける呪術の民族誌—』

京都、人文書院、2010年6月、270頁、2,940円

民族の伝統文化の宝庫と考えられているカレリア共和国を含む北ロシアにその対象をもとめた著者は、偶然か必然か「イリイチ」（仮名）という、呪術の効き目を固く信じる元共産党員と出会う。彼はロシア科学アカデミー・カレリア支部につとめる民族学者だった。

物語のように始まるこの民族誌は、物語のように終わる。本書は現地の呪術実践の文脈にとりこまれ、インフォーマントである呪術師が「日本の研究書に写真入りで紹介された呪術師」という権威を獲得するであろう（pp.246-7）とその呪的「効用」を予言する。

順を追って内容を一瞥してみよう。

ロシアは10世紀末キリスト教を受容し、ロシア正教を国教としていた。正教は、呪術を「異教」として排斥しようとしたが、民衆の間には二重信仰の状況が成立する。正教の聖人と土着の神々や精霊が、正教会の「祈り」と「呪文」が同一視され、シンクレティックな状況となっていたのである。15、6世紀になると、宗教に積極的に関与するようになった国家権力により、呪術は刑事罰の対象となった。この時期には為政者も含めて人びとには呪術の「リアリティ」が信じられていた。ところが18世紀にはいと、啓蒙主義の影響のもと近代化が押し進められる。呪術を「迷信」とみる考え方が19世紀から20世紀に至って決定的となるとともに失われつつある伝統的民族文化の一端として民族学・口頭伝承学の対象として記述され始めることになる。

決定的だったのは、呪術が社会主義建設の障害とみなされたことであった。宗教は人間を欺いて搾取するものとされ、正教会ともども弾圧された。共産主義・無神論教育制度の整備や農業農場（コルホーズ）における近代化、さらには近代医療の整備によって、呪術はモラリティ、「リアリティ」両面から否定されていったのである。このプロパガンダには民族学者も含む学術研究者がおおいに利用された。

しかし、1980年代半ばを過ぎ、ゴルバチョフ政権下で、状況は再び劇的に変わる。危機に瀕しているソビ

エト経済の立て直しのために西側の経済援助が必要だった。そのためには宗教に対する態度を改めざるをえない。1988年に「政教和解」が成立し、1990年に信仰の自由を保障する法律が施行された。ソ連時代に収集されたものの公刊できなかった膨大な呪術資料が出版され、絶版となっていた革命前の文献が再版された。呪術の実践も再活性化する。ここに「呪われたナターシャ」の居場所が、立ち現れることになるのである。「社会主義以前」「社会主義」「その後の現在」が混在する日常の生活世界を記述するためにそれらが混在して現存する空間としてそのままとらえようとする「ポスト社会主義人類学」[高倉&佐々木 2008]の手法を採用する、と宣言する（序章）。

ナターシャは、祖母以前の代から呪われていたという認識を持っている。祖母が再婚したヴァーシャじいさんの姉妹、カーチャが祖母を呪っていた。祖母の息子であるコーリヤに呪いがかかり、コーリヤは溺死。遺体を運搬するとき、その足を縛るのにナターシャのリボンが使われる。そのことが機縁となってナターシャは死んだコーリヤの呪いにつきまといわれる。

姑に呪われたナターシャの結婚生活は、次から次へと不幸に見舞われた。自らの胸の腫瘍、息子の敗血症や子供たちの耳だれ、夫の暴力など。夫と不仲になってからは、夫の愛人、ナターシャに恨みをもったジブシーたちが呪いを仕掛けたという。「ばあさん」（呪術師）たちが治療してくれるが、呪術の効き目は続く。オーリヤばあさんの呪術的処置によってナターシャのもとを去ったコーリヤの呪いは、妹の最初の夫を死に至らしめる。超能力者ナジェージダに救われた、といいながら、夫がかけた「孤独の呪い」におびえるナターシャ。「孤独の呪い」は娘や息子にも影響を与えていると呪術師はほめかす。

彼女は呪術を容易に認めなかった。不信感から呪術師の申し出を聞き入れず、後悔することも多い。いくつもの不幸を経験し、呪術師たちの力を借りて克服するにつれ、社会主義政権下の無神論教育の呪縛から解き放たれ、呪術を「リアリティ」として認識しはじめるのである。ナターシャは、不幸の経験と、解決のための呪術的処置の「成功」によって、社会主義政権によって隠されていた「真実」を発見したのである（第1章）。

著者たちは噂をたよりに北ロシアの呪術師を探す。情報はあいまいでも村にたどりつきさえすれば、呪術師のことは誰でも知っていた。

ポリーナは、祖母から真夜中の儀礼を経て呪術知識を受け継いだ。ライ麦畑、クローバー畑で後ろ向きに歩きながら右手で麦や花をつかみ、風呂小屋で異教の神である小男に、小屋から出たところで聖母マリアに祝福を受け、最後は祖母の唾液を飲んだ。祖母から受け継いだ祈りを唱え、神の力で不幸や病を癒し、痛みを放す。神の力によるものだから、洗礼を受けていない人の相談には乗れないが、行方不明の人間を探し出すことも、戦地へ赴く兵士たちを加護することも、邪視から作物を守ることも、結婚式の守護や子受けも行う。邪悪な呪術の依頼は、祖母のいっつけを守ってきっぱり断っている。

姑の「愛の呪術」で結婚させられたニーナは、ナターシャ同様、不幸な結婚生活を送っていた。どういうわけか、姑が呪術を教え始めた。姑は死ぬ前に呪術知識を伝えきれずに姑は苦しみぬいて死んだ。呪術師は呪術知識を誰かに伝えなければ安らかに死ぬことができない。姑だけでなく、舅、隣人からも呪術知識を学んだが、村ではそれを隠している。しかも医療過誤により歯をすべて失ったニーナの呪文はもはや力を失ってしまった。呪文は歯があるうちに息子の嫁に伝えたという。

リディアは、母から口伝で呪文を教わった。彼女のように呪文は3人にまで伝えることができ、4人目に伝えると効力を失うという呪術師がいる一方で、一人にしかなることができないとする呪術師もいる。呪術知識は年長の血縁者や、親族から受け継ぐケースが多いが、複数の知り合いから教わり、さらにマスメディアに登場する呪術師の呪文もノートに書きつけて保持している呪術師もいる。

いずれにしても、経験に裏付けされた「リアリティ」の内部にいる彼らにとって、「効く」から伝えられている、という循環論はまったく問題にはならないのである(第2章)。

いっぽう、現代ロシアでは、「治療師」「透視能力者」「バイオエネルギー師」「宇宙エネルギー師」「呪術マイスター」などと自称する超能力者が台頭している。彼らは祖先からではなくオカルト書などから知識と実践を吸収し、専業の職業としている。

マルガリータは、仕事先で出会ったカレリア人のばあさんから、死の間際に呪術知識を受け取った。手をとることで「バイオエネルギーのレベルで」(p.154)の伝達が行われたという。また、カレリア人である母方祖母からもノートを譲り受けている。超能力者のほとんどは伝統的呪術師の血筋につながるか、あるいは伝統的呪術師から呪術知識を得ている。力の源泉は神であるとされている点は伝統的呪術師とかわらない。

超能力者は同時に、世界のオカルトを研究し、その実践に結びつけようとする。マルガリータははじめ自分の体験と一致する実践の書かれたオカルト書に熱中し、オカルトスクールでブードゥー呪術を学んだ。その後、超心理学スクールでバイオエネルギーについて学び、正教から祈祷の呪文、ヨガからチャクラ、仏教からカルマ、バラモン教のマントラなどの用語や考え方を巧みにとりいれつつ、「チャネリング」で「アストラル界」との交信をするという異種混交的な儀礼を行っている。

伝統的呪術師が、その効力について多くの説明を行わないのに対し、超能力者は、その力を疑似科学的用語で説明する。呪文で唱える身体部位の名称は解剖学的に精緻なものとなり、「レーザー光線」や「バイオフィールド」などの言葉で呪術知識を解釈しなおす。邪視や呪いは「バイオフィールド」への干渉となり、呪文は「インフォメーション・コード」とされるとされる。これらの西洋のオカルト研究の文脈から得た疑似科学的な説明も、証明が経験に依存している循環論的なものであるが、経験により「リアリティ」を獲得してしまった人たちにとっては問題にならない。むしろ無神論教育を含むかつての政策を批判する意味でも一定の有効性を持っているのである。

民衆レベルでは正教会の教えと超能力は交差している。無神論に対抗する意味もあって、正教会は超能力を批判するものの、「リアリティ」の全否定はできない。むしろ評価はネガティブなものであっても、超能力の「リアリティ」を保証する結果になっている。このような経緯で現代ロシアの超能力は、ますます隆盛を極めているのである(第3章)。

社会主義体制とともに情報統制が崩壊し、規制されていた呪術の情報が現代ロシアのマスメディアにはあふれている。本屋をのぞけば、膨大な実用呪術書が健康コ

一ナーにならばられ、伝統文化としての記録と並んで自己探求、精神世界探求のための書籍が販売されている。大都市にはオカルト書専門店もある。

百冊を超える著書をもつベストセラー呪術師、ステパーノヴァの登場で、呪文は印刷されて万人に利用できる民族の知識となり、特別な能力を持った者のみが行う呪術の領域はほとんどなくなった。読者と対話する企画は、体験談を通じて呪術の「リアリティ」を共有する人の多さを知らしめ、日常生活への呪術的解釈の沈殿に寄与している。呪術師を読者に想定したシリーズでは、社会主義時代の弾圧による知識の喪失感を持つ呪術師たちにステパーノヴァが新たに創作したとみられる呪文を伝統として受け継がせる役割を果たす。

地方紙にみられる呪術講座は、貧困、泥棒、浮気、アルコール中毒など、日常的なトピックを呪術に結びつけて解決策を示す。積極的に実用書を手にとることのない一般読者までも呪術の世界に連れこむ。

いくつもある健康関係のロコミ情報紙は、治療法や実験に混じって一般の人が何かの機会に知り得た呪文を掲示する場となっている。呪術の「リアリティ」を共通項としてこれら実用書、一般紙の呪術情報、そしてロコミ情報紙などのメディアの世界に、失われたかつての地縁共同体にかわる、緩やかなコミュニティが形成されているのである（第4章）。

研究目的で出版される学術資料は、当の研究者の意図に反して、民族の伝統を標榜する呪術実践者に利用される。その研究成果が実用の文脈に移植されてしまうことによって、研究者ははからずも呪術の「リアリティ」を学術的に保証する役目を担わされてしまうのである。

2002年に知り合った当初、共同調査者のイリイチは、呪術の「リアリティ」は確信していたが、自分の呪術的能力については認めていなかった。そんな彼に、兄が行方不明になり、遺体になって発見されるという出来事が起こる。その間にフィールド調査で得た知識にもとづいて呪術的实践を試み、無視できない結果を得た彼は、「呪術師みたいになってしまった」（p.233）。現在、彼のもとには、数多くの相談者が訪れるようになった。彼には呪術の「リアリティ」を「学術」的見地から語ることが期待されているのである。

呪術の「科学」性を保証するオカルト的な研究態度を

示す研究者は多い。それを容認せざるを得ない構造も、またソ連時代の宗教迫害という暗い記憶にその一因がある。日本語で書かれた本書もインフォーマントにその呪術能力の権威づけの「効用」をもつものとして用いられるだろう、という著者の予言は、この文脈で唱えられた（第5章）。

まとめると、次のようになる。ポスト社会主義のロシアでは、在野の呪術実践者と実用書や新聞、ロコミ紙、あるいはテレビ、ラジオ、インターネットなど実用目的のマスメディア情報、および学術目的のマスメディア情報が双方向に情報を交換している。学術目的のマスメディア情報からは、文脈を変えられ、一方通行的に実用目的のマスメディアに情報が流れていく。この循環系の中でその効き目を語る体験談が流通し、呪術の「リアリティ」が正当化されていく構造になっている（終章）。

以上が評者なりにまとめた本書の概要である。記述にその妙があるので要約で本書の真価を伝えることはほとんどできない。ぜひ一度手にとることをおすすめしたい。帯に引かれている「どうして私たちはこうなのでしょう」（p.108）という文句に端的にあらわされているように、呪いとかわる人々のやむにやまれない感じがよく伝わってくる。もっともこの一言は、無神論に対する批判的な言葉なのであるが。

著者は、共同体のなかに秘められていた信仰が表出する過程に注目する視点をファブレーサーダに負っている、と述べる（pp.39-44）。しかし、むしろより顕著な影響は、自ら（この場合は共同調査者だが）が呪術に「つかまる」現実を民族誌に描きこむ、その手法である。その意味で同種のリフレクシヴィティを指向する民族誌であるといつてよい。またルーアマンから受け取ったという、メディアの機能に注目して呪術を信じるプロセスを分析する議論にも説得力がある。文脈を変えると日本のオカルト・ブームにも当てはまる視点である。

以下、評者が気になった点をいくつか述べる。まず、本書のキーワードのひとつである「リアリティ」の中身である。評者の認識では、この概念は、現象学的社会学を吸収する過程で、その中心概念として日本の宗教研究に吸収されたものである〔バーガー&ルックマン 1977, バーガー 1979〕。本書を通読すると、その構成説の文脈で読むとじっくりいかず、単に「本当らしさ」「真実

性」を意味しているように読めるところがある。もう少しはっきり概念規定したほうが、議論はより明快になったのではないか。

紹介される文化人類学の先行研究はかなり偏っているが、そのことが逆に本書の位置づけを明確にしている (pp.39-44)。ただ、それらの事例をア・プリオリに呪術を信じている社会として処理するのはやや乱暴だと思われる。それらの社会もおそらくは一枚岩ではないし、公然と呪いが語られない傾向を持つ社会も多い。実際には「われわれはもうそんなものは信じていない」とあしらわれ、同じ村に何年も住んでようやく呪術の話が出てくる、ということもある。

広域調査を採用したことは、本書の分析を方向付けるとともに資料の性格を決定づけている。本書で用いているナターシャの語りの主要部分は一晩で得たものようだ。このことはインフォーマントたちとの長期の交際ののち、どのような語りが出てくるか読者は将来の報告を楽しみにしてよい、ということでもある。次はどんな物語が紡ぎ出されるか。呪術の「リアリティ」を正当化する循環系に巻き込まれ、呪術師の権威づけに一役買った人類学者の行く末が注目される。

参考文献

バーガー、P.L. & T. ルックマン

- 1977 『日常生活の構成—アイデンティティと社会の弁証法—』山口節郎訳、新曜社。

バーガー、P.

- 1979 『聖なる天蓋—神聖世界の社会学—』菌田稔訳、新曜社。

高倉浩樹&佐々木史郎編

- 2008 『ポスト社会主義人類学の射程』国立民族学博物館調査報告78、国立民族学博物館。

(梅屋 潔 神戸大学)

Email: umeya@people.kobe-u.ac.jp